

巻頭特集

ベンガル研究における 文学的構想力と 歴史的構想力の 交差に向けて

編集責任者

谷口晉吉

丹羽京子

執筆者一覧（掲載順）

北田 信

外川昌彦

神田さやこ

臼田雅之

丹羽京子

古井龍介

谷口晉吉

趣旨と概要

谷口晉吉

丹羽京子

本特集は、昨秋（2012年）の日本南アジア学会全国大会（第25回）における同名のセッションを土台としている。従来のベンガル研究、より広くは南アジア研究においては、ややもすると文学研究と歴史研究とが分離する傾向があったことは否定できない。この特集は、その反省に立って、ベンガル研究における歴史的アプローチと文学的アプローチと

の交流の可能性を探るものである。もとより文学研究と歴史研究は目的も方法も異にしており簡単に結びつけることはできないが、今後のより実り豊かな研究活動につなげていくため、ベンガルという共通の「場」と「人」を対象としている歴史的分野と文学的分野双方の研究の交流を行う意義は少なくないと思われる。本特集においては、両者の交流を図る際のキーワードとして、構想力という言葉を用いているが、この概念は哲学者三木清(1897～1945)に負っている。この言葉が文学的分野における感性的なものを含みこんだ社会・人間の把握と、歴史研究の本分たる客観的事実と論理に基づく社会・人間の把握との交流をとおして、お互いに学びあい、それぞれの領域における社会と人間の把握のリアリティーを深めていきたいというこの特集の趣旨に合致すると考えられるからである。

文学に関して述べれば、ベンガル文学はこれまでタゴールを一種の頂点とした「近代的な」文学を前提として語られることが多かったのだが、その全景を見渡すといわゆる「ハイ・カルチャー」としての文学では見過ごされがちな「文学」シーンが脈々と流れていることもまた事実である。タゴールとてバウルなどとの接触なしではベンガル詩人として大成できなかった側面があり、そうした中世以来のダイナミックな文学活動を視野に入れた文学研究は今後いっそう重要となろう。そのような文脈から、ここでは「文学」を広く捉え、また「文学の場」を意識しつつ、中世におけるベンガルの演劇や近代以降の詩と歌の扱いといった問題を通して、本来分離することができなかった歌謡や演劇的側面をも含みこんだベンガル文学に迫っていくためのヒントが提示されていると言えるだろう。

例えば北田の論考は、従来空白であったベンガルの演劇台本についてのものである。ベンガルはその豊かな演劇伝統にも関わらず、文献としての台本がほとんど伝わっていないことから、これまで演劇という文学的伝統に考察が及ぶことがほとんどなかったが、北田はネパールに残るベンガル語およびミティラー語による演劇台本に注目し、その空白を埋めようと試みている。

また丹羽は、従来文学作品として扱われてこなかったノズルル・ギーティを取り上げているが、丹羽によれば、ノズルルの文学史における扱いは、そのプレゼンスに比して小さく、その理由の一つはノズルルの作

品が「音楽」として捉えられ、正当な「文学」として考えられてこなかったことにあると言う。丹羽はそのような歌作品を文学として扱うことを通して、ベンガル文学の枠組みを見直す可能性について示唆している。

外川が着目するのはタゴールと岡倉の交流である。タゴール、天心双方の記録が限定的であることから、ふたりの初めての出会いがいつの時点であったか、また岡倉天心がシャンティニケトンを訪問した可能性があるかなどに関しては、これまであいまいなままに残されていたが、外川は日本側、インド側双方の資料を厳密に比べることにより、これらの点にせまり、両者の交流をより明確に検証しようと試みている。これは日印交流史における新たな展望の可能性を示唆するものである。

一方、ベンガルの古代から現代までを対象とする歴史研究・地域研究には、これまでさまざまな観点からの蓄積があり、「場」や「人」に関して、ベンガルの各時代の時代的・社会的な背景や地域的特性などを提示することによって、文学をはじめとする他分野の研究に貢献しようところが少なくないと考えられる。顧みれば、近年のわが国のベンガル研究は植民地期とその後に集中し、それ以前の時期に関しては山崎利男の優れた先行研究があるとはいえ、久しく空白状況が続いた。最近になってこの空白がやっと埋められ、ベンガルの古代から現代までを展望する条件が整いつつある。なお、今回の特集では対象を歴史時代に限定しているが、現代ベンガルの地域研究に関しても近い将来に何らかの共同作業が実現することを期待したい。

さて本特集では、古井は、中世初期からムスリム支配開始（ほぼ5世紀から12世紀）までの長期的な展望に立って、ブラーフマナと王権が中心になって、ベンガルにブラーフマナから職能集団に至る社会秩序が構築され、過去の再定義、歴史の読み替えによってその正当性が与えられたことを銅板土地施与文書、ニバンダ、プラーナなどを用いて説得的に示している。また古井は、この動きが、定住農業が拡大する中で森の住民などがベンガル社会に包摂されるという歴史的現実に対応した側面を持つことも指摘している。

神田は、植民地ベンガルの塩専売制度の下における塩市場の構造を、地域市場圏（水系）毎に異なる商人集団と流通網の存在、地域的な文化・社会構造の違いに起因する消費者の嗜好の違い、都市の同業者集団（ダル）の形成などの興味深い論点を交えて提示し、その中で新興塩

商人が植民地都市コルカタを中心として広汎なネットワークを構築し、かつ、かなり早い時期から土地の集積を始めて地主化した過程を幾つかの事例研究を通して明らかにする。

谷口は、植民地後期ベンガルにおける大規模社会諸集団の地域分布には大きな偏りがあり、この偏りはそれら社会諸集団が部族（森の住民など）を母体としたことを示唆すると指摘し、次いで、東ベンガル3県の地域類型を土地所有、借地、小作関係から考察し、隣接する3県の土地制度がかなり異なること、ジュート栽培の拡大に伴い農民負債が増大し刈分小作が急速に拡大しつつあったこと、零細地主（郷紳）と富農の経営形態上の類似性などを指摘して、東ベンガルを典型的な小農地帯とする通説に疑問を呈した。

白田は、わが国におけるベンガル研究の展開を独特な表現で回顧し、「歴史屋」と「現在屋」の交流の重要性を村落調査の経験を踏まえて説き、また関心の赴くままにテーマを掘り下げていきやがてそれがより大きな世界につながるという経験を語り、最後に彼の研究の中心をなすバコルゴンジ県のスワデシ運動の特徴である倫理性の淵源を、それに強い影響を与えたブラフモ・サマージのもつ倫理性とスピリチュアリティの結合と乖離に見出している。

本特集が、これらの多様性に富む諸研究を通して、もし文学、歴史の両分野における多様な研究の交差する地点を探り、また新たなベンガル像を構想するための一つの基礎を築くことが出来たとするなら、その様な機会を与えてくださった本誌に深く感謝したい。

たにぐち しんきち ●東京外国語大学国際社会学部特任教授

にわ きょうこ ●東京外国語大学言語文化学部特任講師